

学生に望む

学 長 小 原 芳 明

学問は「？」に始まり「！」に終わると言われています。実は大学での学修も5つのW (what, when, where, why, who) と1つのH (how)という6つの「？」から始まります。そこにあと2つのW (which, whom) を加えた、知的好奇心と身の回りの不思議を大切にすることを心に留めての大学生活を期待しています。

人間は各自に必要な衣食住確保のために働かなければなりません。そこから解放されて生じた時間が「ヒマ」です。その暇(余った時間)を活かして「読み、書き、計算」を身につけさせようと思われたのが scholē (スコレー 学校)の始まりです。そしていまでも子供たちは将来社会で働いていくのに必要となる、あるいは手助けとなる知識と技術を学校で修得しようとしているのです。今君たちは大学でさらなる学修のスタート台に立っていますが、こうして大学で学ぶ機会(学修に必要な「ヒマ」)を親から与えてもらったことへの感謝の気持ちを大切にしてください。

これから毎日の努力で自分が抱く疑問を解決する知識を得るために、学修を進めていきますが、学び舎に対して

Enter with Respect, Leave with Knowledge.

の心構えは大切です。それはどの学修であっても、未知のことへの畏敬と謙虚さは学問の基本だからです。

これからの大学機会を「あと4年もある」と見るか、それとも「4年しかない」とするかでは大きな差が出ます。昔から「少年老い易く、学成り難し」と言われていますが、学問の道は遠く、また険しいものです。中学校の数学で学んだ方程式に $x + y = a$ がありますが、これを日常生活に当てはめると、二つの作業を「ながら」ではなく、どちらか一つのために時間を使うということの大切さが表れています。つまり大学生として学修に与えられた時間をしっかりと管理することで、大学生活を全うすることになるのです。

近代の大学は自分の将来の夢を実現するための第一歩となるものです。そのために多くのリソースが大学に集積されていますが、それらを有益に活用するには、まず各人が将来、社会で何を実現したいのかの夢を持つことです。昔からこの丘で学ぶ生徒と学生を「玉川っ子」と呼んでいます。そして玉川っ子には「一画多い夢」を持ってもらいたいと創立者は願っていました。

吉田松陰も夢の大切さについて次のように言っています。

夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、

計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。

故に、夢なき者に成功なし

自分の夢(大志)を描き、その実現へ向けての大学での学びの道は厳しいものでしょう。しかし、その厳しさを乗り越えてこそ、新しい時代に相応しい知識と技術を修得できるのです。それは社会人としての評価を得られることへと繋がるのです。その意味で、大

学では君たちが自分の課題を持って必要な知識を積極的に修得していくことが鍵となるのです。

大学での1単位は、1時間の授業に対して教室外で2時間の学修（予習と復習）を前提としています。授業時間割に「空き時間」があるのは、予習と復習のための時間として確保してあるからです。

すべての科目には授業計画（シラバス）が用意されていますので、これからそれに従って君たちはより主体的に学修していくこととなります。大学での授業スタイルは高等学校のそれとは異なります。そのために本学では新入生が大学での学修スタイルに馴染み、勉学を促進するためにFYE（First Year Experience）を提供しています。だれもがこの初年次教育を通して大学での授業スタイルに馴染む努力を払うことを期待しています。

これからの社会（日本国内外）活動では、一層の自己管理が求められます。その一つは自分の健康と安全の確保です。日本社会の国際化にともない、昔のような「日本の水と安全はタダ」ではなくなってきました。本学の周辺街も、昼から夜への状況変化は著しく、夜は決して安全で健康的であるとは言えません。ひと時の快楽への誘惑も一段と強くなってきますが、そうした勧誘に打ち勝とうという気持ちがあってこそその大学生としての自覚と責任です。社会へ巣立つ前の4年間を、さらなる自己管理能力を身に付ける機会としてください。

この丘では大学生の他に3歳の幼稚園児（K）から高校生（12年生）までの玉川っ子たちも一緒に学校生活を送っています。そうした玉川の教育環境を踏まえ、今日から最高学府に学ぶ者としての自覚、誇り、そして責任を持ってこの丘での生活を送ってください。